

国語科における見学旅行のもつ意味

—— 大和路見学をいかに指導したか ——

畑 実・鈴木洋一郎・佐藤クニ子・酒井 為久

大和路見学を実施して、今年は3回目を迎えた。そのあらましを述べ、国語学習との関連に留意しながら、見学旅行の持つ意味と問題点とをさがし出したい。

I 計画と実施

イ、計画

期日は10月7日(日)～8日(月)の1泊2日で、高校2年全員を対象とした。費用は約1900円。見学地と行程は昨年を省りみて次のようにした。

第1日
長谷寺——大和三山遠望——飛鳥浄御原宮跡——
飛鳥寺——酒船石——飛鳥山路散策——岡寺——
石舞台——橘寺——川原寺——丸山古墳遠望——
橿原公苑宿舎

第2日
橿原神宮——奈良盆地車窓見学——法隆寺——
東院夢殿——中宮寺——唐招提寺——薬師寺——
秋篠寺——平城京跡発掘跡——法華寺

昨年と異なるところは、室生寺の見学を取り止め飛鳥地方の見学に1日を費したこと。法華寺・平城京跡等も見学し、限られた時間内にまとまった地域の見学を有効に行うようにしたことである。

ロ、事前指導

出発の1か月前から準備にとりかかった。まず、生徒にグループを作らせそれぞれグループノートを作った。2年生98名が15のグループに分れた。A組は抽選により人数の一定なグループに、B組は気の合う者の集りとなった。そこで、グループ毎にテーマを決め見学及び見学地に関する研究をすること、見学に行く場合のグループの行動の規約を作ることを課題とした。

共同研究のテーマの中、国語に関係あるものは次のようなものである。

大和三山と万葉集

飛鳥地方を詠んだ万葉の歌

薬師寺の仏足石歌碑について

会津八一の歌と奈良地方

「古寺巡礼」(和辻哲郎)を読んで

グループ別に問題と取り組み、見学当日もグループ

単位の行動をとることにしたことを見学後の生徒の評価でみると、

評 価	5	4	3	2	1
人 数	25	39	19	8	3

となっている。抽選でグループを作ったA組の方に2.1の評価をしたものがやや多かった。

こうしたグループの学習活動をまとめる意味も兼ね、見学に行く1週間前から国語、社会、芸術の担当教師が「万葉と文化」「歴史と地理」「芸術」などの面から、大和路の歴史と文化について解説し、生徒の質問に答えた。国語では、薬師寺の仏足石歌碑の説明を導入にし、大和三山をめぐるつつ万葉集の世界を解説する一方、薄田泣菫の「ああ大和にしあらましかば」や会津八一の「南京新唱」など近代詩歌の紹介を行った。又、図書館の一角に特別コーナーを設けて、関係参考図書・資料を展示した。「見学の栞」は必要に応じて印刷したプリントをあとでまとめて作成することにし、規格を統一した。

ホーム・ルームではグループ毎の行動の規約の全体での検討を行い、グループノートは随時提出させ指導を加えた。

ハ、見学当日

秋晴れの好天に恵まれた。第1日の飛鳥路の見学は郷土史家小島貞三氏の情熱あふれる説明をお願いした。

先生の郷土を愛する心には何か学ぶものがあったと思います。先生は71才という年齢にもかかわらず説明していらっしゃる時には、とても若く見えた。私達も先生のように何かを一つ一生懸命にやってみたいと思った。

という生徒の感想である。

橿原の宿舎は落ち着いた、近くに店舗一つない静かな所である。夕食後約2時間、大広間で見学地についての話し合いを行った。見学後の生徒の評価では、

評 価	5	4	3	2	1
人 数	27	46	21	4	0

というように、活発な楽しい雰囲気の話し合いであった。付添の教官の助言をまじえ、地に着いた内容であって、国語に関しては万葉の風土が予想より狭いという実感が述べられたりした。

第2日は寺院の見学が中心であり、月曜のせいかゆっくり見学することが出来た。

二、事後整理

帰ってからグループノートの整理と感想文の提出をさせた。次いで、見学旅行についての調査を行い、社会科、美術科でもそれぞれレポートが課せられた。文化祭には8mmの上映、簡単な資料の展示もところみられた。

さて、見学地に対する生徒の印象を整理してみると次のようになる。

表Ⅰは印象がよく、感銘が深いものを全体から2つずつあげさせた結果である。

表 Ⅰ		男	女	計
第 1 日	長 谷 寺	18	21	39
	飛 鳥 淨 御 原 宮 跡	13	6	19
	飛 鳥 寺	8	11	19
	飛 鳥 山 路 散 策	2	3	5
	岡 寺	1	0	1
	石 舞 台 寺	1	1	2
第 2 日	橋 寺	2	0	2
	檀 原 神 宮	5	2	7
	法 隆 寺	23	7	30
	中 宮 寺	5	4	9
	唐 招 提 寺	7	5	12
	葉 師 寺	17	11	28
	秋 篠 寺	1	1	2
平 城 京 跡	1	1	2	
法 華 寺	0	5	5	

長谷寺が感銘深いという理由は、一番初めの見学地であったことと、寺とまわりの山の調和がよくとれていること、読経の最中に見学したこと等があげられている。飛鳥淨御原宮跡と飛鳥寺の感銘の深い理由としては、説明者の小島先生の話に左右されたところが大きいとする者が多かった。檀原神宮は落ち着いた静かさが、印象に残った理由である。第2日はやはり法隆寺、唐招提寺、葉師寺のそれぞれの趣が印象に残り、仏教文化の偉大さに感銘させられたという者が多かった。と同時に、それらの遺産の保存状況に関心を持つ

生徒も多かった。

表Ⅱは印象のよくないものを一つあげさせた結果である。

石舞台の印象が特に悪い理由は、俗化されていたということである。ちょうど、ピクニックの若い人達がバレーボールなどをしており第1日の他の見学地とは異質のものが感ぜられたのである。わるい印象のところはないとしたものも比較的多かった。なお、法隆寺の印象がよくないとする者の理由は、観光地化されすぎているというものである。

表 Ⅱ		男	女	計
第 1 日	岡 寺	7	1	8
	石 舞 台 寺	11	15	26
	川 原 寺	0	5	5
第 2 日	法 隆 寺	3	1	4
	秋 篠 寺	2	1	3
	平 城 京 跡	3	1	4
無		8	4	12

次に、生徒自身の見学態度についての自己評価は

評 価	5	4	3	2	1
人 数	17	53	11	4	0

であり

高校2年生の興味と関心を呼んだ見学旅行であったといえよう。

Ⅱ 指導について

イ、はじめに

今回の見学旅行を省りみて、どの程度意義を感じるかという調査の結果は、

評 価	5	4	3	2	1
人 数	58	30	6	1	2

である。では、生徒達がどんな点に意義を感じたかという点を分類すると

万葉の世界と時代がわかるような気がする。

古代文化(仏像・寺院)に触れえた。

古代と現代のへだたりに思いをはせた。

自然に親しみ余裕が感ぜられた。

解説者(小島氏)の郷土愛の情熱にうたれた。

団体生活の楽しさを味わった。

大きく以上のようにまとめられる。

この結果から見ると、今回の見学旅行は一応の成果を収めたものと考えて無理がないように思われる。ここに至った指導のあり方とよりよい成果を期待できる指導はいかにあるべきかを省りみることにする。

まず、見学直前の学習指導は生徒のグループ学習から始まった。その研究テーマの設定の仕方の指導が十分でなかったため、名所案内記的なレポートやテーマに適切を欠くものがあった。お互の研究を発表し合うという点からも、研究テーマは教師側で決め選択させるのが理想である。そして、見学終了後に研究が完結されるよう指導するのがよいと思われた。

教師の側からの補足的な学習指導はむりに先入観念をうえつけるような指導でなく、焦点を絞って解説するのが望ましい。一般的な説明は国語・社会等の授業内容の復習と結び付けると印象深いようである。芸術方面はスライドを使用して説明を進めたのであるが、スライドや写真と実際のものとの差は大きいという感想が多かったため、そうした視聴覚教材利用の限界を認識してかかる必要があるようである。

団体行動の規約は自主的にグループ毎に作らせたが、協調・常識・礼儀の基調を貫くように指導した。

ロ、学習との関連

見学に付随する学習内容	関連ある教科
万葉集	国語甲乙 社会日本史
日本の歴史	社会日本史 国語甲乙
仏教思想	社会倫理 国語甲
奈良盆地	社会人文地理 日本史
自然美の鑑賞	国語甲 美術
仏像・寺院の鑑賞	美術 国語甲 社会日本史
大和路に関する詩文の鑑賞	国語甲
創作の題材	国語甲 美術
先生や案内者との接触	H R 社会倫理
集団生活と行動	H R 社会倫理

上にあげたのが、諸要素別に見学と学習の関連をまとめた表である。これらの要素が総合された見学旅行の成果を高めるためには諸要素と関連のある教科や特別教育活動の指導を深める必要がある。見学直前の指導のみでそれを全うするのは不可能であるから、平生の学習指導の積み重ねるが、見学旅行の成果につながる重要な働きをしていること自明である。その平生の指導をまとめるのが見学の事前指導の役割の1つと考えられる。又、1教科のみではなく、数教科にわたる

学習内容を持つ要素が多いのも注意を要する。そういう事柄の指導のかたよりをなくし、調和のとれた見方を指導するのも事前指導の役割の1つであろう。

次に、見学旅行の成果を利用し一層発展的に指導を進める方向も考えねばなるまい。例を万葉集にとると、国語甲では3年に扱われている。万葉の世界の一端は大和路見学で深く触れえたとし、触れうる指導をしなくてはならないのだが、その発展として3年になって扱う万葉集の読解・鑑賞が十分行きわたるよう心がけている。

ハ、国語科の指導

前項で指導のあり方の大要を述べた。この項では、国語科の指導について整理しておこう。

見学の事前指導は次のようである。

1、万葉集の抜粋の評釈。

大和三山を扱った歌。飛鳥地方に関連のある歌。万葉の代表歌人、柿本人麿、山上憶良の歌。

2、薬師寺の仏足石歌碑の説明。

和歌の形式についての解説。万葉集の文学史的な説明。

3、見学地の句碑・歌碑の説明。

芭蕉(唐招提寺)。子規(法隆寺) 佐々木信綱(薬師寺)。

4、長谷寺観音と平安時代の文学について。

紀貫之の「人はいさ心も知らず」など。

5、薄田泣菫の「ああ大和にしあらましかば」の鑑賞。

国語甲教科書中の単元「近代詩抄」に載っているで、その読解鑑賞。

6、会津八一の短歌の鑑賞。

7、参考図書を紹介。

中村直勝「奈良・大和路の魅力」。和辻哲郎「古寺巡礼」。井上政次「大和古寺」。亀井勝一郎「大和古寺風物語」等。

見学後の事後整理として、

1、感想文を書く。

感想の根拠を表現するように注意する。

2、「ああ大和にしあらましかば」を使ってのテストを行う。

3、研究のまとめを行う。

グループ・ノートに記入して提出。

なお、1年の国語甲において「国語」(好学社)の

単元 自然に親しむ

浄瑠璃寺の春 堀辰雄

単元 旅と文学

長崎へ 斎藤茂吉

などの教材を扱い、3年の国語甲では

単元 上代文学

上代の文学 久松潜一

夕浪千鳥 万葉集

単元 伝統と創造

日本的な美しさ 加藤周一

新しい様式の創造 和辻哲郎

を扱う予定である。国語乙は高等古文（三省堂）三において「古代の和歌」を扱うことになる。

二. ま と め

薄田泣菫の「ああ大和にしあらましかば」を読解・鑑賞する場合、

大和路を歩いているときは我々自身が古代の世界にいるような気がした。

という感想も生れた、見学旅行を行う前と後では鑑賞の仕方に差が出るのは当然である。見学後の方が能動的な深い鑑賞を期待できよう。又、

教室では学べない何かをつかんだようです。

大層有意義な旅行であった。

という感想にもあるように、今後の学習を広く、深く進めうる素材を体得しているにちがいない。ここに第1の意味を認める。

例えば堀辰雄の「花あしび」を扱う場合、古寺の見方や感じ取り方が問題の中心になると思うが、その古

寺は浄瑠璃寺で今回の旅行の見学地ではない。しかし、ものの見方、感じ方のような本質的な問題にも触れうる共通の問題を今回の見学旅行が持っていたということが、堀辰雄の文の読解・鑑賞にどれほど役立つかを考えると国語学習を総合的に推進させる意義は大きいと思われる。これが第2の点である。

第3は、国語科の問題とも他教科特に社会美術の問題とも区分けできない総合的な問題もしくは、教科に属さない問題を学習できるということである。次いで、第4には学習指導と生活指導の兼ね合いのよさに見学旅行の成果が期待できることである。

以上、見学旅行の持つ意義を省りみた。そこには国語を始めとする社会・美術等の学習活動やホームルームの生活等が織りなす網の目をうめる楽しさが満ちあふれていた。そして、網の糸もそれにつれて一層強いものになって行くようだ。より大きな楽しさをすくい取るには学習指導・生活指導という網がしっかりしていなくてはならないという実感が私達に残った。

本稿は、昨年本校紀要第7集の「国語科における見学旅行のもつ意味——奈良・京都見学をいかに実施したか——」の続報である。昨年の稿と相補って完結する報告になっている。